

せんもんか
専門家
なが じかん
長い時間において自然に
まかせ自分も腹から願う
せんもんか
専門家をめざしていく。

なが じかん
長い時間においてなに
が起きているか。自然
にまかせたわらいの
生活の道をたどる。

なにが起きているか。自分
がどうかかわるか。

どうもまともに相手にでき
ません。

〔どうにも方法や手ごたえ
や持続性がない。〕

〔どうもほんものでありま
せん。〕

なにが起きているか。自分
はどうしたものか。

〔なにが起きているか。自分
にどう関係しているか。〕

〔さて、どうしたものか。〕

じかんを大切に自然にまかせ
たわらいの生活の道をた
どる。

自然を知り自然にまかせ、
どうわらい、食べ、住むか。

〔自然にまかせ、どうわら
い、食べ、住むか。〕

〔木もと竹うら〕

人間には不思議な世の中、
心配の種をなくし幸運を
冥想して待つ。

〔人間の予想や願い〔こわい不思議な
とは別の世の中、世の中、幸運は
心配の種をなくす 冥想して待つ。〕
のもよい。〕

時間を大切にさまざまな
道を着実にたどる。

〔元旦を節目に、とど〔時間を大切に〔短い時間や
まらず、あせらず、視野をひろく 時間をこえた
失敗を成功へ、さま 着実な道をた こと。〕
ざまな道を考える。〕 だる。〕

だめ状 況を先に予感しつつ、
他の専門家のように自分も腹
からの願いをかなえていく。

さまざまだめ状 況を予感
し、さわがぬ。

ああ、だめだ。

〔ああ失敗、こまった、だめ
だ、しょんぼり。〕

〔油断した、よけいなことを
した、危険なことをした。〕

〔ああ、とりかえしがつか
ない。〕

ぜったいぜつめい 予感し、よけいな
ことも言わぬ。

〔絶体絶命〕

〔危機を予感し、よけいなこ
とも言わぬ。〕

ただ実行を積み重ねた専門
家を尊重しつつ自分も腹からの
願いがかなうものと行動する。

努力と解決の人にあこがれる
のみでなく、自分の腹からの願
いがかなうものとして行動す
る。

〔努力と解決の人にあこがれ
ていればいい、というわけ
でもない。〕

〔新しい腹からの願いがいつ
かなうと強くかまへ行動
する。〕

〔ただ実行を積み重ねた欠け
もある専門家を尊重する。〕

どう育ち家族や人とどうつきあひよりひろい人生をひきよせるか。

どう育ち家族や人をどう思い意外な人生をひきよせるか。
〔子どもや若いときにどう育ち、それ〔正 直に家族や人を思い
なりに好きな芸をどういかすか。〕 意外な人生もあるか。〕

どう育ち家族や人とどうつきあひよりひろい人生をひきよせるか。

〔元旦を節目に、とど〔時間を大切に〔短い時間や
まらず、あせらず、視野をひろく 時間をこえた
失敗を成功へ、さま 着実な道をた こと。〕
ざまな道を考える。〕 だる。〕

ぜんたい い
全体 生きることわざまんだらよ
よいこと 新たなことなどを着実に柔軟にどう進めるか。

すす
進める
よいこと 新たなことなどをきんちようして進める。

〔よいこと 新たなことを「はい、はい」と鳥が立
つように進める。〕

ああいそがしい、ああほしい、ああきんちよう。

〔ああ心配、きんちよう、はらはら。〕

〔ああいそがしい、ああほしい。〕

組織などのさまざまなやりとりにおいて
確実に柔軟にどうたたかうか。

〔確実に柔軟にどうたたか〔組織などがうまくいくかいか
うか。〕 いか。〕

他とのやりとりにおいてさまざまにあること。

〔ひいきや先導する者が逆〔他のためにあぶないことをした
にめいわくになる。〕 り他から利益を横取りしたり。〕

そして

社会において顔と顔とのなめらかなほんねのご縁をどう築いていけるか。

どう育ちどんな人ともどうわたりあひほんねの人生を築けるか。

ほんねより甘い和をもとめる日本社会か。

〔ほんねをかくしよくひびくことばから和をもとめる、という日本社会。〕

うわつら、お調子、好きなものへのかかわり、甘い関係。

〔好きなものへかかわる〔うわつらやお調子につ
とか甘い関係とか。〕 いてはこんなところ。〕

ど
縁 どんな人ともわたりあひ関係を築けるか。

目や顔や言いかたやからだのなかに注意し
てあらゆる人と相談し意外な関係を生む。

〔目の表 現や言いかたに注意しあらゆる人と相談〔顔やからだのなか
すれば意外な腹づもりの発見や知恵もあるか。〕 による人間関係。〕

それぞれなりの苦勞や好みや情 報や行動がある。

〔それなりの情 報や〔苦勞や好みを同じ者どうしがわ
行動があります。〕 かりあひ切りぬけていく。〕

〈単刀直 入〉

どう育ち家族や人とどうつきあひよりひろい人生をひきよせるか。

どう育ち家族や人をどう思い意外な人生をひきよせるか。
〔狭い家族などになんだかんだ
があっても知らされていない
ことがあるかもしれません。〕

ことばも大切にしつつ、現実とのなめ
らかな縁にて成功に備える。

世の中とのなめらかな縁をめぐらし成功に備
える。

成功にどう備えるか。

〔ものごとやたたかいをどう進めるか。〕

〔すぐれてじまんでできる状 態までになり
たい。〕

〔のちのちの成功に慎 重に備え人のなか
の自分をみがいていく。〕

世の中とのなめらかな縁をわかりやすくめ
ぐらしたい。

〔価値や意義や情けの〔世の中になめらか
縁を正 直にわかりや につながり対応し
すくめぐらす。〕 ていきたい。〕

ことばも大切にしつつ、現実や実質を大切にする。

〔かたちとか有名とかでなく実質が大切。〕

ことばも大切にすし、現実をおちつかせることも大切にす。

〔ことばのくりかえし〔へたな考えはやめ、〔事実を知り現実の必然を
も、現実を知ること 聞くべきことはすぐ どうおちつかせるか。〕
も、大切にす。〕 に聞いておこう。〕

ちぐはぐとかもとの状 態にもどりそうとか。

ちぐはぐ。

うまくいきませんね。

〔うまくいかずもどかしい。〕 〈雲をつかんでなをかむ〉

へた、場ちがい、役立たず、効果なし。

〔どうにもへただったり〔役立たず効果なし。〕
場ちがいがいたり。〕

〔もとの状 態にもどりそう。〕

そしてとくに

いっばんじん せんどうしや
一般人と先導者とか社会
のさまざまな顔がどうま
とまるのか。

〔一般人も先導者もそれなり
に引き立てよ。〕

社会のさまざまな顔がまとま
らないときとまとまるときと。

社会にさまざまな顔があり
社会がまとまらないこともあ
る。

〔社会にあるさまざまな顔。〕

〔社会に問題な人が多く
社会がまとまらないこ
ともあり。〕

〔大猿の仲も異越同 舟も。〕

その上にて

くろう かねしやかい
苦勞あるお金社会から
たいへい きよ しやかい
泰平なより清い社会へ
の道はどこに。

くろう かねしやかい
苦勞あるお金社会のどこ
につるやたいがあるか。

りこうそうだが高みから
あやつたり悪かったり。

〔高みの見物〕

〔りこうそうだがあやつ
ったり悪かったり。〕

お金と苦勞と運命。

〔足が棒になる〕

〔金めあてと貧乏、無理
も通用する苦勞ばかり
の社会か。〕

〔もうけやお金や運命に
ついて。〕

〔よごれてくさった社会
にもつるやたいがそれ
なりにある。〕

かくち こうりゆう たいへい
各地が交 流する泰平なよ
り清い社会はまだ無理か。

〔江戸の天下泰平をさらに清
くする社会はまだ無理か。〕

〔それぞれの土地に暮し、い
つ成功してもどるか。〕

と
論
さまざまな論理。

〔矛盾などをふくむさまざま〔中途半端とかおおげさとか〔別のものなのです。〕
まな論理があります。〕 ちがいないとかの矛盾。〕

〔あれもこれはいつどのよ
うに都合よくいくのか。〕

大きいものから小さいのを見ると
か、ほんのちょっと、とてもせまい。

〔大きいものから小さ〔ほんのちょっと、
いものを見る。〕 とてもせまい。〕

どう育ち家族や人とどうつきあいよりひろい人生をひきよせるか。

どう育ち家族や人をどう思い意外な人生をひきよせるか。

正直に家族や人を思い意外な人生もあるか。

ご縁 左下部

狭い家族などになんだかんだがあっても知らされていないことがあるかもしれません。

〈知らぬが仏〉

家族になんだかんだがあります。

親が有名か子がすぐれているか、そんな親子もある。

〈親の光は七光り〉 〈とびがたかを生む〉

子どもと親の家族のあれやこれや。

家族はみだれながらもなんとか続きます。

〈遠くの親類より近くの他人〉 〈親孝行したいときには親はなし〉

〈子どものけんかに親が出る〉 〈子はかすがい〉

〈律義者の子だくさん〉

子どもは意外にしっかりしている。

〈負うた子に教えられて浅瀬をわたる〉 〈子どもは風の子〉 〈親はなくとも子は育つ〉

無理をする年寄りをそまつにもできずあつかいにこまることもある。

〈年寄りと仏壇は置きどころがない〉 〈年寄りの冷や水〉

世間を知らない狭い家族のなかのこと。

〈亭主の好きな赤烏帽子〉 〈芋の煮えたもご存じない〉 〈内弁慶〉

大きいものから小さいものをみるとか、ほんのちよっと、とてもせまい。

ほんのちよっと、とてもせまい。 〈すずめのなみだ〉 〈ねこの額〉

人生は苦なのか、楽もあるのか。

人生は捨てられたり拾われたり良くなったり悪くなったり。

〈上り坂あれば下〈捨てる神あれば拾り坂あり〉 う神あり〉

苦も楽もある人生。

〈苦あれば楽あり、〈楽あれば苦あり 楽あれば苦あり〉 苦あれば楽あり〉

人生は苦なのです。

〈四苦八苦〉 〈七転八倒〉

苦楽の人生、意外な展開もあるか。

人生には意外な展開もある。

わざわいが多くても、大きな福が返ることもある。

〈えびでたいをつる〉 〈わざわいを転じて福となす〉

じょうだんがほんとうになることもある。

〈うそから出たまこと〉 〈ひょうたんから駒〉

正直に人を思って生きたほうがいいよ。

〈天に向ってつばをはく〉 〈うそをいえば地獄へ行く〉

ああ家族。わかっていないこともある。

子は結局、親に似るが、それまで親の心がわかりにくい。

子どもから老人まで家族はほのぼの。

〈老いては子に従え〉

子は親にならなければ、親の心がわからない。

家族とくにはじめの子は甘くなるのかなあ。

〈親の心、子知らず〉 〈子を持って知る親の恩〉

〈親ばか子ばか〉 〈総領の甚六〉

結局、親と同じような大人になる。

〈寝る子は育つ〉

〈かえるの子はかえる〉 〈瓜のつるになすびはならぬ〉

論理

矛盾などさまざまな論理。

矛盾などをふくむさまざまな論理があります。

さまざまな論理があります。

あたりまえとか、無理とか、意外とかの論理。

あたりまえですね。

〈北に近けりや南に遠い〉 〈犬が西向きや尾は東〉

〈雨の降る日は天気が悪い〉 〈にわとりははだし〉

〈大風がふけば桶屋が喜ぶ〉

〈石に花さく〉

〈右をふめば左が上る〉

〈大同小異〉

三度目に注意しよう。

〈二度あることは三度ある〉 〈三度目の正直〉

長所もあれば短所もあります。

〈長所は短所〉

〈一長一短〉

〈過ぎたるは、なお及ばざるがごとし〉

中途半端とかおおげさとかちがいないとかの矛盾。

中途半端とかおおげさとかの矛盾。

〈帯に短し、たすきに長し〉

〈針小棒大〉

〈五十歩百歩〉

別のものなのです。

〈水と油〉

似ているどころかまったくちがうのです。

〈月とすっぽん〉

〈雲泥の差〉

さまざまな論理。

あれもこれもはいつどのように都合よくいくのか。

あれもこれもは都合よくいくときと失敗するときがある。

あれもこれもと欲ばり失敗。

〈二兎を追う者は一兎をも得ず〉

〈あぶはち取らず〉

都合よく得がふえた。

〈一挙両得〉

〈一石二鳥〉

〈かもがねぎをしよってくる〉

都合のよいときや行きがかりのとき。

〈乗りかかった船〉

〈わたりに船〉

好きなものへのかわり。 うわつら、お調子、好きなものへのかわり、甘い関係。 うわつらやお調子についてはこんなところ。

好きなものにより接近する。

好きなものをさがし見つけ味をしめる。
 〈鶴の目たかの目〉 〈目が無い〉 〈味をしめる〉
 〈ひざを乗りだす〉

好きなものへかかるとか甘い関係とか。

熱中、没頭。
 〈脇目もふらず〉 〈矢も盾もたまらず〉

ああ、待ち遠しい、なにもできない。
 〈一日千秋〉 〈指をくわえる〉

甘い関係。
 〈目の中に入れても痛くない〉
 〈ことばに甘える〉

なぜかお調子よくしています。
 〈借りてきたねこ〉
 お調子よく遊びがちな人
 のようす。
 〈なまけ者の節句働き〉
 〈粋が身を食う〉
 〈八方美人〉

〈となりの花は赤い〉
 うわさとはこんなもの。
 うわつらについての思いがどうあるか。
 ついつい話をしていてその人があらわれたりする。
 〈人のうわさをいうはかもの味がする〉 〈うわさをすればかげがさす〉
 うわさどくが悪いこと、うわさはとても早くひろまるがそのうちに消えもする。
 〈人の口には戸が立てられぬ〉 〈悪事、千里を走る〉 〈人のうわさも七十五日〉

どんな人ともわたりあい関係を築けるか。

縁 左中部

目や顔や言いかたやからだのなかに注意してあらゆる人と相談し意外な関係を生む。

目の表 現や言いかたに注意しあらゆる人と相談すれば意外な腹づもりの発見や知恵もあるか。

口先や見せかけより目の表 現や腹づもり。
 うまく見せかけたつもりでもだめ。
 〈とらの威を借るきつね〉 〈頭かくしてしりかくさず〉
 口だけでなく目の表 現や別の腹づもりもある。
 〈口と腹とはちがう〉 〈目は口ほどに物をいう〉

おちついて考えよく聞きよく教え丸く言え。
 聞くこと教えることを多くもの おちついて考えてから
 いうことしかることを少く。 しゃべったほうがよい。
 〈二度聞いて一度ものいえ〉 〈短気は損気〉
 〈二度教えて一度しかれ〉 〈口はわざわいの門〉
 〈丸い卵も切りようで四角〉
 〈物もいよいよ角が立つ〉

言いかたによく注意して相談すれば意外な知恵や発見もあるか。
 人は意外にやさしかったり
 見かけからわからないところがある。
 〈人は見かけによらぬもの〉
 〈鬼の目にも涙〉

相談すれば意外な知恵も出るか。
 〈物は相談〉
 〈三人寄れば文殊の知恵〉

顔やからだのなかによる人間関係。
 相手の顔をまともに見ず、顔色をうかがう。
 〈目を落す〉 〈目くじらを立てる〉 〈耳が痛い〉
 〈顔をうかがう〉
 からだのなかが動いています。
 なみだ、胸、肝、へそ、はらわたの異変。
 なみだのみ、胸がつぶれ、はらわたがちぎれる。 腹やへそがどうにもおちつかない。
 〈なみだをのむ〉 〈胸がつぶれる〉 〈へそを曲げる〉
 〈はらわたがちぎれる〉 〈肝をつぶす〉 〈腹の虫がおさまらない〉
 〈へそが茶をわかす〉

それぞれなりの苦勞や好みや情報や行動がある。
 苦勞や好みを同じ者どうしがわかりあい切りぬけていく。
 すがり、なんとか切りぬけ、それなりに強くもなる。
 弱く負けた者が歯ざりしたり小唄をうたったり。 人は何にでもすがり、思わず助ることもあります。
 人は何にでもすがることがあります。
 さらなる堪忍のなかから切りぬける道があるか。

苦しみ悩みや好みはそれぞれ同じ者どうしがわかりあう。
 同じ苦しみ悩みの者どうしとわかりあう。
 〈蓼食う虫も好き好き〉 〈同病相あわれむ〉
 〈同じ穴のむじな〉

それなりの情報や行動があります。
 弱い者でも追いつめられたりすると強い。
 小さく弱そうでもあなどれない。
 〈一寸の虫にも五分のたましい〉 〈さんしょうは小粒でもびりりとからい〉
 おとなしい人でもがまん限界というものがあります。
 〈仏の顔も三度〉 〈無理は三度〉 〈なぶればうさぎも食いつく〉
 〈窮鼠、ねこをかむ〉

恩や信頼や現実がわからない人もつきあっていく。
 恩や信頼を知らないひと 恩や信頼や現実の社会から
 孤立してしまう人もいます。
 負けやまちがいをみ
 とめられない人。
 〈へらざ口をたたく〉 〈木で鼻をくくる〉
 〈はっても黒豆〉

〈ぼうずにくけりや袈裟までにくい〉 〈ひじ鉄砲を食わす〉
 恩や信頼を知らないひと
 恩や信頼や現実の社会から
 孤立してしまう人もいます。
 負けやまちがいをみ
 とめられない人。
 〈へらざ口をたたく〉 〈木で鼻をくくる〉
 〈はっても黒豆〉

〈へたの長談義〉 〈目くそ、鼻くそをわらう〉
 〈りくつとこう薬はどこへでもつく〉 〈さるのしり笑い〉
 〈七たびさがして人をうたがえ〉 〈頭の上のはえを追え〉

〈引かれ者の小唄〉
 〈ごまめの歯ざり〉

〈苦しむときの神だのみ〉
 〈いわしの頭も信心から〉
 〈おぼれるものはわらをもつかむ〉
 〈地獄で仏に会ったよう〉

〈窮すれば通ず〉
 〈ならぬ堪忍するが堪忍〉

〈单刀直入〉

ほんねをかくしよくひびくことばから和をもとめる、という日本社会。

日本社会において明確によくひびくことば。

明確になっている発言。

〈つるの一声〉 〈釘をさす〉 〈歯に衣着せぬ〉 〈異口同音〉

ほんねをかくしても和をもとめる、という社会。

無理にさからい、かかわり、目立ち、正しくあるのは、よそう、という生きかた。

強い者にさからわず、よけいなことにかかわらず、という生きかた。

〈けんか両成敗〉 〈長いものには巻かれろ〉 〈さわらぬ神にたたりなし〉

強い人のもとで目立たないようにしよう。

〈寄らば大樹のかげ〉 〈出るくいは打たれる〉

〈曲らねば世がわたられぬ〉

ご縁 左上 部

かたちとか有名とかでなく実質が大切。

有名だから良いとはかぎらぬ。

〈名物にうまいものなし〉 〈はやりものはすたりもの〉

かたちだけよく実質がおろそかになっていませんか。

〈羊頭狗肉〉 〈絵にかいたもち〉 〈仏作ってたましい入れず〉 〈山高きがゆえにたつとからず〉

ご縁 中下部

ことばも大切にしつつ、現実や実質を大切にすることばも大切にしつつ、現実や実質を大切にすることばも大切に

ことばも大切にするし、現実をおちつかせることも大切にする。

ことばのくりかえしも、現実を知ること、大切にする。

ことばをくりかえし聞き読むことが大切です。

〈読書百ぺん、義おのずからあらわる〉 〈門前の小僧、習わぬ経を読む〉

現実を知って論語などを理解する。

現実を知らずに夢をみていてよいかい。

論や百聞より証拠や 一見を大切にする。

〈机上の空論〉

〈論語読みの論語知らず〉

〈論より証拠〉

〈畳の上の水練〉

〈百聞は一見にしかず〉

〈京の夢大阪の夢〉

へたな考えはやめ、聞くべきことはすぐに聞いておこう。

〈へたの考え休むにいたり〉

〈聞くは一時のはじ、聞かぬは一 生のはじ〉

事実を知り現実の必然をどうおちつかせるか。

へたでもやってみて、つきあってみて、ものごとや人のことを知る。

やってみてつきあってみて 事実を知る。

やってみないと、つきあってみないと、ものごとや人のことはわからない。

やってみなければはじまらない。

〈馬には乗ってみよ、人には添うてみよ〉

おも 思いきってやってみるのがよい。

〈あぶない橋も一度はわたれ〉

〈あたくだける〉

〈へたな鉄砲も数うちゃ当たる〉

〈案ずるより産むがやすし〉

〈まかぬ種は生えぬ〉

現実をどうおちつかせるか。

現実を優先する場合もある。

〈うそも方便〉 〈花よりだんご〉 〈鬼の居ぬ間に洗濯〉

必然を思い根本を正せ。

〈ねこにかつおぶし〉 〈ねこを追うより 魚をのけよ〉

すぐれてじまんでできる状態までになりたい。

すぐれていて尊敬できる。

〈目が高い〉

尊敬、感謝、感心。

〈舌を巻く〉

〈頭が下る〉

〈一目置く〉

じまんしています。

〈自画自費〉

〈鼻が高い〉

だれかと肩をならべるまで
うでを上げてふるいたい。

〈肩をならべる〉

うでを上げてふるいたい。

〈うでが上る〉

〈うでをふるう〉

世の中とのなめらかな縁を
めぐらし成功に備える。

成功にどう備えるか。

ものごとやたたかいをどう進めるか。

目をつけるからどう手をつなぐかまで。

目をつけるから手を広げるまで。

〈目をつける〉

〈的を射る〉

手を打ち、手を回し、手を広げていく。

〈手を打つ〉

〈手を回す〉

〈手を広げる〉

〈手を切る〉

一網打尽へ、火
ぶたを切るか。

〈一網打尽〉

〈火ぶたを切る〉

のちのちの成功に慎重に備え人のなかの自分をみがっていく。

あくまでも慎重に備えてからとりかかる。

あくまでも慎重にとりかかろう。

〈念には念を入れよ〉 〈石橋をたたいてわたる〉

〈せいては事を仕損ずる〉 〈三べんまわってたばこにしょ〉

〈備えあればうれいなし〉

負けたり損しても
あとで勝ったり得
することがある。

〈負けるが勝ち〉

〈損して得取る〉

ものごとや競争をどう
着実に進めるか。

ものごとや競争の進みぐあい。

〈レールをしく〉

〈水をあける〉

〈山を越す〉

足が地につき腹を決める。

〈腹を決める〉

〈足が地につく〉

人の身になり人と比べて自分を玉へみがっていく。

人の身になり人と比べて自分がまともになっていく。

〈人のふり見てわがふり直せ〉 〈わが身をつねって人の痛さを知れ〉

〈玉みがかざれば光なし〉

世の中とのなめらかな縁をわかりやすくめぐらしたい。

価値や意義や情けの縁を正直にわかりやすくめぐらす。

情けの縁をめぐらすわかりやすい礼儀ある仲間へ。

人生をかけた出会いと
情けがまわる社会。

〈一期一会〉

〈情けは人のためならず〉

〈物いえばくちびる寒し秋の風〉 〈実るほど頭の下る稲穂かな〉

旅から恋まで縁の不思議さを想う。

ほれてしまっとうしよう。

〈あばたもえくぼ〉

〈文はやりたし書く手は持たず〉

縁や出会いの不思議さを大切に。

〈縁は異なるもの味なもの〉

〈袖ふりあうも他生の縁〉

〈牛に引かれて善光寺参り〉

旅で助けあうこともあればはじ
をかきすてることもある。

〈旅は道連れ世は情け〉

〈旅のはじはかきすて〉

〈季下にかんむりを正さず〉

自然な礼儀のあるしっくりした仲間づきあいへ。

自然な礼儀が大切だ。

〈親しき仲にも礼儀あり〉

〈礼も過ぐれば無礼になる〉

どういう仲間づきあいを水と魚のようにしっ
くりした関係。

〈類は友を呼ぶ〉

〈朱に交れば赤くなる〉

〈魚心あれば水心〉

〈水を得た魚〉

ご縁 中上部

世の中になめらかにつながり対応していきたい。

なめらかなころにてつながっていききたい。

なんとなくなめらかに
つながる関係。

息が合い、ひざを交え、
腹を割るような関係。

〈息が合う〉

〈腹を割る〉

〈ひざを交える〉

〈竹馬の友〉

〈風の便り〉

ころがなめらかにつなが
りたい。

体内や表情からなとな
くわかる。

〈以心伝心〉

〈虫が知らせる〉

相手のことを思い心配する。

〈気は心〉

〈心にかける〉

〈心が洗われる〉

〈心頭を滅却すれば
火もまたすずし〉

よけいなうれいをもたずそのときそのときに対応していく。

〈臨機応変〉 〈一喜一憂〉 〈杞憂〉

かゆいところに手がとどいたり、とどかなかったり。

〈かゆいところに手がとどく〉 〈隔靴搔痒〉

なるべく正直に立ち去るときはきれいに。

やはり正直がよい。こまってもなるべく正直がよい。

〈正直は一生の宝〉 〈うそつきはどろぼうの始り〉 〈渴しても盗泉の水を飲まず〉 〈立つ鳥あとをにごさず〉

ご縁 右部

一般人と先導者とか社会のさまざまな顔がどうまとまるのか。

一般人も先導者もそれなりに引き立てよ。

ばかも馬子もりこうもそれなりに引き立てよ。

ばかも使いつつりこうも引き立つ。

一般人という土台もある。

〈えんの下の力持ち〉 〈どんぐりの背くらべ〉

〈馬子にも衣装〉

たとえば一つおぼえのばかもなんとか使える。

〈ばかの一つおぼえ〉 〈ばかとはさみは使いよう〉 〈ばかがあればこそりこうが引き立つ〉

社会のさまざまな顔がまとまらないときとまとまるときと。

社会にさまざまな顔があり社会がまとまらないこともある。

社会にあるさまざまな顔。

顔とひみつを大切にする社会か。

顔を大切にする日本社会か。

顔が利き、顔が広い。

〈顔が利く〉

〈顔が広い〉

顔がつぶれたり、どろをぬられたり。

〈顔がつぶれる〉

〈顔にどろをぬる〉

しゃべらない口か、ひみつをまもれる口か。

口が、かたいか、すべるか。

〈口がかたい〉

〈口がすべる〉

あまりしゃべらないか、ひみつまでしゃべるか。

〈口が重い〉

〈口が軽い〉

人にはさまざまな面がある。

女性はとうとうに美しくみえるか。

〈鬼も十八、番茶も出花〉

〈十人十色〉

〈夜目遠目笠の内〉

社会に問題な人が多く社会がまとまらないこともあり。

時間をつぶしその場をごまかしています。

〈お茶をにごす〉 〈油を売る〉

だらしのないところの人もいる。

現実をみなかつたりわすれたりする。

〈のどもと過ぎれば熱さをわすれる〉 〈くさいものにふたをする〉

〈あとは野となれ山となれ〉

社会には問題な人もいます。

〈一事が万事〉

実際より大げさに言ってしまうことがある。

〈逃げた魚は大きい〉

〈大ぶろしきを広げる〉

社会がしっかりした意見でまとまらないことがある。

〈かべに耳ありしょうじに目あり〉

〈付和雷同〉

〈船頭多くして船山にのぼる〉

犬猿の仲も呉越同舟も。

〈呉越同舟〉 〈犬猿の仲〉

さて、どうしたものか。

とつぜん、あきれた、ちょっとわからない。

とつぜん、思いもかけず。

〈やぶから棒〉〈寝耳に水〉

おどろき、あきれた、信じられない。

おどろきです。〈目をうたがう〉

〈ほとに豆鉄砲〉〈目を丸くする〉

ことばにならない、ことばがつづかないほど、ひどい、あきれた。

〈言語道断〉〈二の句がつけない〉

ほんとうかどうか。確信なくためらう。

〈まゆつば〉〈半信半疑〉〈二の足をふむ〉

どうしたらよいかこまりました。

〈歯が立たない〉〈手も足も出ない〉〈らちがあかない〉

あぶないかもしれないが、運にまかせてやってみる。

〈一か八か〉〈薄氷をふむ思い〉

それなりに考えてみるか。

〈手をこまぬく〉

なんとか考えてみるか。

〈ない知恵をしぼる〉

〈物は考えよう〉

なにが起きているか。

落ちついたか。ひど

いか。

〈雨降って地固まる〉

〈雨後のたけのこ〉

〈聞いて極楽、見て地獄〉

なにが起きているか。自分はどう関係しているか。

なにかが起きているのか、たいしたことはなかったのか。

〈火のないところにけむりは立たぬ〉

〈大山鳴動してねずみ一ぴき〉

自分にも関係すると思って、注意する。

自分に関係ないことと、言うておられるか。

〈きのうは人の身、今日は我が身〉〈灯台もと暗し〉

〈やなぎの下のどじょう〉

専門家左下部

時間を大切に自然にまかせたわらいの生活の道をたどる。

自然を知り自然にまかせ、どうわらい、食べ、住むか。

自然にまかせ、どうわらい、食べ、住むか。

わらい、食物、薬、湯水。

食物や薬をどうとるか。

口を刺激するものもとってみるか。

〈ふぐは食いたし命は惜しし〉〈良薬は口に苦し〉

薬に頼りすぎるな。

〈薬より養生〉〈薬も過ぎれば毒となる〉

〈においまつたけ、味しめじ〉

わらい、腹をととのえ、湯水をつかう。

わらいは健康や福のもとです。

〈病は気から〉〈わらいは人の薬〉〈わらう門には福きたる〉

腹をどうととのえるか。

〈腹八分目に医者いらず〉〈茶腹も一時〉〈ひだるいときはまずいものなし〉

〈からすの行水〉

〈住めば都〉

〈木もと竹うら〉

時間を大切にさまざまな道を着実にたどる。

時間を大切に視野をひろく着実な道をたどる。

視野の狭さを反省して着実に動く。

ひろい視野から着実に動け。

大きな計画を立て少しずつ行え。

〈ローマは一日にして成らず〉〈千里の道も一歩より起る〉

〈急がばおれ〉

〈傍目八目〉

狭い視野にとらわれていませんか。

〈木を見て森を見ず〉あなたの視野は狭くありませんか。

〈筆の髓から天井を見る〉

〈針の穴から天をのぞく〉

〈井の中のかわず大海を知らず〉

方法や道具と上手につきあえ。

うまくいかなかったりじゃまだったり。

方法に問題あり。

〈木によって魚を求む〉

〈木に竹を接ぐ〉

〈わら千本あっても柱にはならぬ〉

〈月夜にちょうちん〉

道具にとらわれるのは名人でない。

〈弘法、筆を選ばず〉

〈へたの道具調べ〉

時間を大切に事前に注意し準備しよう。

事前に注意し準備しよう。

油断せずじゅうぶんに注意し準備しよう。

〈油断大敵〉

〈浅き川も深くわたれ〉

〈転ばぬ先のつえ〉

〈どろぼうを捕えてなわをなう〉

時間とくにもものごとのはじめや一日のはじめを大切にしよう。

〈はじめよければ終りよし〉

時間とくにも早起きを大切にしよう。

〈時は金なり〉

〈早起きは三文の徳〉

短い時間や時間をこえたこと。

〈一朝一夕〉

〈三日ぼろず〉

〈前代未聞〉

先がみえず、うまくいかないこともありましよう。

先がみえませんです。

〈五里霧中〉

〈一寸先はやみ〉

なぜか悪いことばかり。

〈悪いことは重なる〉

〈弱り目にたたり目〉

終わってしまったからではどうしようもない。

〈後悔先に立たず〉

〈あとの祭り〉

人間の予想や願いとは別の世の中、心配の種をなくすのもよい。

どうせ厳しい世の中、心配の種をなくすのもよい。

心配の種のない生活もよい。

〈あしたはあしたの風がふく〉

〈はだかですてを落とすためしなし〉

思わず得することもある。

〈たなからぼたもち〉

〈残りものには福がある〉

厳しい世の中。

〈弱肉強食〉

〈おごる平家は久しからず〉

人間には不思議な世の中、心配の種をなくし幸運を冥想して待つ。

こわい不思議な世の中、幸運は冥想して待つ。

こわい世の中、幸運は寝て待つ。こわい不思議に関心あり。

〈果報は寝て待つ〉

〈地震、かみなり、火事、おやじ〉

〈当るも八卦当らぬも八卦〉

〈こわいもの見たさ〉

すぐに過ぎる年月において元旦という節目を大切にす。

〈光陰矢のごとし〉

元旦という節目を大切にしよう。

〈一年の計は元旦にあり〉

〈来年のことをいえば鬼がわらう〉

元旦を節目に、とどまらず、あせらず、失敗を成功へ、さまざまな道を考える。

自分や人の失敗を成功につなげよ。自然のように、大都市のように、とどまらず、あせらず、さまざまな道を考える。

〈失敗は成功のもと〉

〈他山の石〉

〈流れる水はくさらず〉〈桃栗三年、柿八年〉〈すべての道はローマに通ず〉

どうもまともに相手にできません。

どうにも方法や手ごたえや持続性がない。

どうにも方法や手ごたえがない。

ふわりふわり手ごたえなし。

平気でやわらかく対応。

どうも手ごたえがありません。

〈やなぎに風〉 〈かえるの面に水〉 〈ぬかに釘〉 〈豆腐にかすがい〉 〈のれんに腕押し〉

〈さじを投げる〉

〈頭でっかちしりつぼみ〉

どうもほんものでありません。

〈竜頭蛇尾〉

〈馬脚をあらわす〉

専門家 左上部

努力と解決の人にあこがれるのみでなく、自分の腹からの願いがかなうものとして行動する。

努力と解決の人にあこがれていればいい、というわけでもない。

ぶつかり努力し解決する人にあこがれる。

すぐに解決するすぐれた人にあこがれる。

すぐに問題を解決する人もいる。

〈快刀乱麻を断つ〉 〈一を聞いて十を知る〉

目立つすぐれた人にあやかりたいな。

〈つめのあかをせんで飲む〉 〈るりもはりも照せば光る〉

〈犬も歩けば棒に当る〉

やってみる。そしてとことん努力する。

おそれずにやってみよう。

〈虎穴に入らずんば虎子を得ず〉 〈物はためし〉

とことん努力せよ。

〈七転び八起き〉

〈雨だれ石をうがつ〉

良いこと好いことにはじゃまが入りやすいなあ。

〈月にむら雲、花に風〉 〈好事、魔多し〉

専門家 右部

だめ状況を先に予感しつつ、他の専門家のように自分も腹からの願いをかなえていく。

さまざまだめ状況を予感し、さわがぬ。

ああ、だめだ。

ああ失敗、こまった、だめだ、しょんぼり。

ああこまった、だめだ、しょんぼり。

もはやどうしようもない。

〈まな板のこい〉

〈蛇に見こまれたかえる〉 〈一難去ってまた一難〉 〈青菜に塩〉

自分でも人にたいしても失敗にこりています。

〈あつものにこりてなますをふく〉 〈穴があつたら入りたい〉

油断した、よけいなことをした、危険なことをした。

危険なことをする。

〈とらの尾をふむ〉 〈火に油をそそぐ〉

よけいなことをしましたね。

〈きじも鳴かずばうたれまい〉 〈寝た子を起す〉

油断してさらわれた。

〈とびに油揚げをさらわれる〉 〈月夜に釜をぬかれる〉

ああ、とりかえしがつかない。

〈飛んで火に入る夏の虫〉 〈覆水、盆に返らず〉

絶体絶命を予感し、よけいなことも言わぬ。

〈絶体絶命〉

危機にまつわることばあれこれ。

危うくいのをとりも 危機です。

どした。

〈九死に一生を得る〉

〈起死回生〉

〈前門のとら、後門のおおかみ〉

〈危機一髪〉

危機を予感し、よけいなことも言わぬ。

危うきに近寄らず、よけいなことは言わぬ。

〈君子、危うきに近寄らず〉 〈言わぬが花〉

〈泣き面に蜂〉

ただ実行を積み重ねた専門家を尊重しつつ自分も腹からの願いがかなうものと行動する。

ただ実行を積み重ねた欠けもある専門家を尊重する。

ただ実行を積み重ねた専門家を尊重する。

初心のままにただ実行しおとろえない技能を得る。

理屈をこねず、なすべきことを実行せよ。仕事などに慣れるといつまでもおとろえない。

〈沈黙は金〉

〈いちはやく、おこなうはかたし〉

〈不言実行〉

〈むかしとったきねづか〉

〈習うより慣れよ〉

〈板に付く〉

〈初心わするべからず〉

〈もちももち屋〉

長年の積み重ねというものが大切。

長年の経験というものは大切。

〈年寄り家の宝〉

〈かめの甲より年の劫〉 〈ちりも積れば山となる〉

欠けない名人や達人や専門家というのではない。

達人にも失敗はある。

〈弘法にも筆の誤り〉

〈上手の手から水がもれる〉

〈さるも木から落ちる〉

〈かつばの川流れ〉

自分のことはわすれる専門家。

〈医者不養生〉

〈紺屋の白ばかま〉 〈なんでもこいに名人なし〉

道

苦勞あるお金社会から泰平なより清い社会への道はどこに。

苦勞あるお金社会のどこにつるやたいがあるか。

りこうそうだが高みからあやつったり悪かったり。

りこうそうだがあやつったり悪かったり。

仕事がりこうにできそうだが人を軽くあやつってもいるか。

なめらかに話し、仕事もてきぱき、りこうな人。人を軽くみて行動し使う。

〈目から鼻へぬける〉
〈立て板に水〉
〈口も八丁、手も八丁〉

人にかくれて行動し、人を軽くあつかう。
〈目をぬすむ〉
〈鼻であしらう〉

〈あごで使う〉 〈赤子の手をひねる〉 〈高みの見物〉

あげ足を取ったり、裏をかいたり。

〈裏をかく〉
〈あげ足を取る〉

〈足を洗う〉 〈腹が黒い〉

お金と苦勞と運命。

金めあてと貧乏、無理も通用する苦勞ばかりの社会か。

苦勞ばかりやへたな売り買いや貧乏状態。

へたな売り買いや貧乏状態。

苦勞ばかりでした。

〈労多くして功少し〉
〈骨折損のくたびれもうけ〉

へたな売り買い。

〈とらぬたぬきの皮算用〉
〈安物買いの銭失い〉

〈ないそではふれぬ〉

ひそかに借りぬすむ。けち。つまり自分の都合ばかり。

ひそかに借りたりぬすんだり。

〈人のふんどしですもうを取る〉
〈ねこばばをきめる〉

〈しわんぼうの柿の種〉 〈我田引水〉

金、ずるさ、にくまれっ子、無理が通用してしまう社会か。

〈生き馬の目を抜く〉

なぜかにくまれっ子とか無理とかも通用する。

〈無理が通れば道理が引っこむ〉
〈にくまれっ子、世にはばかる〉

金を中心の社会かなあ。

〈人を見たらどろぼうと思え〉
〈地獄のさたも金しだい〉

もうけやお金や運命について。

〈ぬれ手にあわ〉

二束三文とか、足が出るとか。

〈足が出る〉
〈二束三文〉

運命やお金が消えそう。

〈つめに火をともし〉
〈風前のともしび〉

よごれてくさった社会にもつるやたいがそれなりにある。

〈はきだめにつる〉 〈くさってもたい〉

各地が交流する泰平なより清い社会はまだ無理か。

江戸の天下泰平をさらに清くする社会はまだ無理か。

金が天下を回り礼節を知り鬼のいない社会はあるか。

金が天下を回り礼節を知る社会はあるか。

〈わたる世間に鬼はなし〉 〈ただより高いものはない〉 〈金は天下の回り物〉 〈衣食足りて礼節を知る〉 〈武士は食わねど高ようじ〉 〈むかしはいまの鏡〉

清すぎる社会はまだないのかもしれない。

どろぼうにもそれなりの合理性や苦勞がある。

〈盗人の昼寝〉
〈どろぼうにも三分の道理〉
〈どろぼうも十年〉

〈水清ければ魚すまず〉

それぞれの土地に暮し、いつ成功してもどるか。

ぶじに暮しているか、いつ成功してもどるか。

〈故郷へ錦をかざる〉 〈便りのないのはよい便り〉

土地によってかわる風習を大切にしよう。

〈所かわれば品かわる〉 〈郷に入っては郷に従え〉

すすめる

よいこと新しいことなどを着実に柔軟にどうすすめるか。

よいこと新しいことなどをきんちようしてすすめる。

よいこと新しいことを「はい、はい」と鳥が立つようにすすめる。

よいこと新しいことを「はい、はい」とすすめる。

よいこと新しいことは早いうちにしなさい。

〈善は急げ〉 〈鉄は熱いうちに打て〉

〈二つ返事〉

〈足元から鳥が立つ〉

ああいそがしい、ああほしい、ああきんちよう。

ああ心配、きんちよう、はらはら。

〈固唾をのむ〉

〈手に汗をにぎる〉

ああいそがしい、ああほしい。

〈のどから手が出る〉

ねこでも立っている親でも使いたいほどいそがしい。

〈立っているものは親でも使え〉

〈ねこの手も借りたい〉

組織などのさまざまなやりとりにおいて確実に柔軟にどうたたかうか。

組織などとして確実に柔軟にどうたたかうか。

確実に柔軟にどうたたかうか。

確かな兵法で風穴をあけ馬から射る。そしてかぶとの緒をしめる。

〈生兵法は大けがのもと〉

〈風穴をあける〉

〈将を射んと欲すればまず馬を射よ〉

〈勝つかぶとの緒をしめよ〉

失敗も柔軟にいかしてたたかう。

〈柔よく剛を制す〉

むしろ失敗をいかして立ちあがる。

〈けがの功名〉

〈転んでもただでは起きぬ〉

組織などがうまくいくかいかないか。

組織などがうまくいかない場合。

どうもじゃまで、こまる。

〈目の上のこぶ〉

〈手を焼く〉

自分勝手な人にいやな思いをする。

〈まゆをひそめる〉 〈虫がいい〉

非協力的な態度。

〈手を抜く〉

〈足を引っばる〉

〈鼻をあかす〉

他とのやりとりにおいてさまざまにあること。

ひいきや先導する者が逆にめいわくになる。

〈ひいきのひきたおし〉

〈ミイラ取りがミイラになる〉

他のためにあぶないことをしたり他から利益を横取りしたり。

〈火中にくりを拾う〉 〈漁夫の利〉

ちぐはぐとかもとの状態にもどりそうとか。

ちぐはぐ。

うまくいきませんね。

うまくいかずもどかしい。

〈笛ふけどもおどらず〉 〈二階から目薬〉 〈雲をつかんでなをかむ〉

へた、場ちがい、役立たず、効果なし。

役立たず効果なし。

働きかけても効果がない。

聞き流し、頭に入らず、平気か。

〈馬耳東風〉

〈上の空〉

〈しかの角を蜂がさす〉

〈焼け石に水〉

まともらず役立たず。

どうも役に立たない。

〈うどの大木〉 〈無用の長物〉

〈鳥合の衆〉

どうにもへただったり場ちがいだったり。

まねして失敗したり、場ちがいでもできなかったり。

〈鶴のまねをするからす〉

〈おかへあがったかっぱ〉

〈やぶをつついて蛇を出す〉

もとの状態にもどりそう。

〈もとの木阿弥〉 〈砂上の楼閣〉